

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

江戸時代後期、幕府はぜいたくを取りしめる禁令を出し、それは歌舞伎や錦絵（浮世絵）といった庶民の娯楽にまで及んでいた。

地本問屋（印刷・出版も行う書店）「白子屋」の跡継ぎである政之介は、絵を描くことが大好きな十代後半の青年である。父は「白子屋」の店主であり、かつ役者絵の名門である鳥居派の絵師鳥居清長としても知られていた。ある日、父は鳥居派の四代目に任命された。それはまだ幼い、三代目の孫の庄太郎を鳥居派の五代目絵師に育てるためだった。

政之介は父に鳥居への入門を認めてもらうために自信作の絵を見せたが、もう絵を描くのをやめるように言われてしまう。

「それでは話が違います」

政之介は絵が好きで、錦絵が好きだから、白子屋の跡を継いでもいいと思ったのだ。絵を描きつづけることもできると思ったのだ。

「清長さんが描けばいいじゃないですか。おとつあんが忙しすぎるのです。鳥居の仕事のほかに五代目を育てなきゃならな  
(注1)いからでしょう。でも、庄太郎さんはまだ小さい。わたしが鳥居の門人になって、五代目になってもいいです。そうすれば、おとつあんが美人画を描くことも、店に戻ることできます」

父の顔色が変わった。

「お前が五代目だと。うぬぼれるな。ありえん話だ」

口が過ぎたと、政之介も思った。

「鳥居の名を入れたのも、そういうつもりか」

「いえ、そんな……」

政之介は今回の絵に、「鳥居清政」と名を入れた。「清政」でなく、「鳥居清政」と入れたのははじめてだ。納得のいく仕上がりだったので、尊敬する絵師、鳥居清長の息子であると示したかった。

しかることはない、父は自分に言い聞かせた。

だが、このまま鳥居清政の絵が出回ったら、世間は清政を鳥居の跡継ぎと思うのではないか。それほどの出来栄である。しかし、それでは、鳥居の家系を自分たち親子が乗っ取ることにになりかねない。代々続いた白子屋の店も、途絶えかねない。

「いい機会だから、話しておく」

政之介が口を閉ざしたのを機に、父は改めて座りなおした。

「鳥居の庄太郎は今年、六つだ。まだほんの子どもだが、なかなかいい筋をしている。そこそこの絵師になるだろう。まもなく正式に入門させて、五代目になる修業を始める。いいか。お前は白子屋の跡を継ぐんだ。鳥居に入門することなど、できない相談だぞ。ましてや五代目だなんて。冗談でも、二度と口にするな」

父もうすうすは気づいていた。

最近の政之介が、ますます絵にのめり込んでいるのは、お登勢や伝治郎からも聞いていた。①家に帰るたびに、政之介の画帳

を見るのが楽しみでもあり、恐ろしくもあつた。

政之介は確実に腕を上げていく。絵師としてやっていく力も十分ある。庄太郎でなく、政之介が鳥居の生まれだったなら、すぐにでも五代目になれたろう。それを認めてあげられないのが不憫でもあつた。

しかし、自分の役目は、庄太郎を五代目に育てることだ。それ以外の道はなかった。

ここまできたら、厳しく言うしかなかった。

「そんなことも分からずうぬぼれているなら、今すぐ、絵をやめなさい」

「何をいきなり、そんなことを言われるのですか」

「お前がのぼせているからだ。これ以上見過ごすわけにはいかん」

「すみません。久しぶりに満足いくものが描けて、少し浮かれていました。五代目なんて本気じゃありません。よそで口にしたこともありません」

「いや、だめだ。これ以上描いても、お前の才能はここまでだ。伝治郎やおつかさまにも、どれだけ心配かけてると思ってるんだ。もう、店に専念しなさい」

いつも穏やかで威厳のある父が、めずらしく激昂し、大声を上げた。

「絵が描けなくなるくらいなら、店を継ぐこともできません」

「だったら店も継がんでよい。手代の中から有能なものを選んで継がせるまでだ」

となりの部屋で聞き耳を立てていたお登勢が、あわてて顔を出した。

「あなた、それではあんまりですよ」

「甘やかすな。いつか、はっきり言わなければいけないかったのだ」

政之介は母を突き飛ばすようにして、部屋を飛び出した。

「伝治郎、政之介を止めておくれ」

「若旦那、お待ちください。坊ちゃん……」

お登勢の甲高い声と、伝治郎のしゃがれ声が、政之介の背後で交錯した。

どこをどう歩いたろう。

暗闇の町を、当てもなく歩き回った。

父の声が、耳から離れない。

——「絵はもう、しまいにしなさい」

——「これ以上は伸びん」

橋の欄干に頭を打ち付けて、父の声を振り落とそうとした。

いっそ描けなくなればよいと、②右手がはれるまで打ち付けた。

やってくる大八車の下に右手を差し出した。が、人にどなられ、体当たりされて、道の端に引きもどされた。

やがて人気もなくなり、雨が降ってきた。

疲れ果て、大きめの軒を見つけて座り込んだ。

気がつく、天井の高い、板張りの部屋らしきところにいた。政之介は、柱にもたれて眠り込んでいたらしい。

高窓から、明るい日ざしが差し込んでいた。  
見知らぬ男たちが大勢、動き回っている。

「起きたかい」

男が一人、声をかけてきた。

「どこですか、ここは」

「覚えてねえのか。ここは森田座だ。芝居小屋だよ。ゆうべ、この前でうずくまっていたから、中に入れてやったのよ」

「そうですか……」

頭がガンガンと痛んだ。

「何があつたか知らねえが、尋常じゃなかったぜ。びつしより濡れて、体中冷えきっちまってよ。気付いたら一杯飲ませたら、そのままひっくり返っちゃったんだ。酒は初めてだったのかい」

「……はい」

「帰るとこはねえのかい」

「……」

「なんだい、はつきりしねえな。まあ、いいさ。ここはみんな行く当てのない連中ばかりだ。好きなだけいりやあいさ」

男は幅広の刷毛で、畳ほどの大きさの板に、絵を描いていた。さくらの花びらが一面に舞っている。

「なんですか、これは」

「芝居の書割(背景画)だよ。おれらは道具方だな、道具を作ったり書割を描いたりして、芝居を盛り上げるのが仕事さ」

政之介は目を見張った。十年以上、毎日のように絵を描きつづけてきても、こんなに大きな絵は描いたことがなかった。

政之介の目に生気がよみがえったのを見て、男が言った。

「絵は好きか」

「……」

「やってみるか」

政之介は刷毛を受け取った。赤くはれた右手が痛んだ。

うす墨で一氣に線を引くと、桜吹雪の中に、古木の枝が生き生きとうねった。

「ほー、いいじゃねえか。使い物になりそうだぜ」

「はあ……」

「名はなんていうんだい」

「政……、政吉です」

「おいら定八だ。よし、じゃあ、もう一枚、描いてもらうぜ」

定八と名乗った男は、この芝居小屋の裏方を仕切っているようだった。大柄で、張りのあるだみ声には威圧感がある。だが、言葉のはしばしと、笑ったときの目じりのしわに、人柄の良さがにじみ出ている。

「芝居もすっかりすたれちまってな。たいした仕事もねえし、行くところがある連中はみんなよそへ移っていったが、空っぽにするわけにはいかねえやな。いつ声がかかってもいいように、支度だけは整えておかねえとよ」

定八よりも少し年上らしい男が、笑いながら政之介の肩をたたいた。

「若い、定八にだまされるなよ。芝居が好きでたまらねえ連中が居座ってるだけさ。さっさとよそへ行った方がいいぜ」

政之介は政吉と名を変え、ここで芝居の書割や、舞台道具を作って暮らすようになった。

絵をやめるようにわれて家を飛び出したのに、転がり込んだ先でもやはり絵を描く羽目になった。皮肉なめぐり合わせに、政之介は苦笑いするしかなかった。

だが、仕事は楽しかった。

多少あらつぽいが気のいい男たちが、黙々と仕事をし、夜になったら大部屋でざこ寝し、熱っぽく語り合う。いままでの政之介の生活にはなかった事ばかりで、新鮮だった。

朝から晩まで、一日中、絵を描いた。

絵の具と紙と時間は、いくらでもあった。

手があいた時は、好きな絵を好きなだけ描いてよかった。

絵ばかり描いているとしかるものもない、政之介の正体を、あれこれさぐって詮索するものもいなかった。

さしずめ、仕事にあぶれた下っ端絵師か、奉公先を追いつけられたごその手代だろう。あるいは身なりがいいから、お店の若

旦那が遊びすぎで勘当でもされたか。そんなところだろうと思われていた。だが、それはどうでもよかった。そんな若者は、不景気の江戸にはいくらでもいたのである。

雨の晩に転がり込んできた行く当てのない若者が、とびきり絵がうまかった。それだけで十分だった。しかし政之介は、素性が知れそうな美人画はやめて、大部屋の男たちの似顔絵や、書割風の景色などを描いては、定八に見せた。そのたびに、男たちは腕前の良さに驚き、称賛の声を上げた。

たまに芝居が打たれたときは、舞台のそでで一部始終を観察して、描きつづけた。

役者の生き生きとした表情と、鍛え抜かれた肉体。このご時世にどこで調達したのかと思われるような、豪華で華やかな衣装や被り物。観衆の喝采を浴びたときの、役者の何ともいえない達成感や上気した息づかいまで、身近に感じ、感動しながら筆を走らせた。

木々が芽吹き、青々と茂り、やがて色づく季節になっても、政之介の暮らしは変わらなかった。

年も改まってしばらくたったころ、定八が、身なりの整った男を連れてきた。

「政吉、お前さんに客人だ」

政之介には見覚えがあった。

薦屋重三郎だ。

③ 禁令で処罰を受けていらい、初めて見る薦重の姿だった。少しやつれて老け込んだようだが、その分むしろ、温和な雰囲気を見せていた。

薦重は政之介を認めると、一瞬、驚きの表情を浮かべた。

それから得心したように、

「何も言うな」

と目で制して、定八に言った。

「達者な絵を描く若いのは、こちらですかい」

「へい、さようで」

薦重は政之介に向き直って聞いた。

「政吉さんとやら。お前さんの腕前を見せてもらいたいんだが、ちよいとうちへ来てみませんか」

政之介は返事に迷った。まだ事態がのみこめない。

定八が言った。

「この方はな、江戸一番の地本問屋、耕書堂の薦重さんだ。うちの小屋に、とんでもなく達者な絵を描く若いのがいるってうわさを聞いて、わざわざ寄ってくださいったんだよ」

「はあ……」

「またかい、はつきりしねえな。薦重さんに見初められるなんて、天地がひっくり返ったってあることじゃねえぜ。おれらに遠慮することあねえ、早く行っちゃいな」

薦重と連れ立って歩いては目立ちすぎる。

政之介は暗くなるのを待って、耕書堂の勝手口に立った。

「政吉と申します。こちらの大旦那さんに……」

「へえ、聞いております。こちらへ」

若い手代は、店の裏手にある土蔵に、政之介を連れて行った。

「こちらでお待ちください」

ほどなくして、薦重がやってきた。

「やはり、白子屋の若旦那でしたか」

「……はい」

「みなさん心配しておいでですよ」

「店のみんなはどうしてますか」

「みなさん、お変わりありません。すぐにもお連れすべきところですが、だいたいの事情は察しがつきます。まだお帰りになる気になれないんですたら、しばらくここで、絵を描いてみませんか」

「しかし……」

「こんな部屋で申し訳ありませんが、悪いようにはしません。美人画でも役者絵でもなんでも結構です。清長さんの秘蔵っ子の、あなたさんの腕を見たいんですよ」

「秘蔵っ子なんて……。清長は、わたしを認めてはくれませんでした」

「何をおっしゃいますか。認めてますよ。認めてるから、筆を折らせようとしたんじゃないやありませんか」

「わかりませんね、そんな話」

「あなたが絵師をつづけていたら、鳥居のお家はつぶれます。あなたに勝る跡継ぎはいませんからね」

「鳥居をつぶす気なんて、わたしには毛頭……」

「おとなにおなりなさいな、若旦那。清長さんは、あなた以上にお辛かったですよ」

「……」

「明日の朝、道具を持ってこさせます。口の堅い者を一人つけますから、なんでも言いつけてくださいまし。今日はゆつくり休んで」

翌日から、政之介は片時も筆をはなさず描きつづけた。

手本などなくても、すべて頭の中に入っていた。芝居小屋で観た役者たちの顔、衣装や被り物、大見得を切ったときの手の返し……。

人気役者たちの姿はすべて、舞台のそこから盗み見て描いていた。それを思い出すだけで、自然と筆は運んだ。

——「美人画はしまいだ」

——「お前はここまで」

——「これ以上は伸びん」

清長の言葉を思い出しながら、たたきつけるように、激しく線を引いた。書割で鍛えた大胆な筆遣いや奔放な線も、不安なく引けた。

数日して、葛重がやってきた。

部屋中に散らかった絵を、一枚ずつ手に取って見ては、重ねていった。

清長そっくりと言われた清政の線ではなかった。<sup>④</sup>無骨で荒々しく、何かに憤っているような、たたきつけるような線だった。そのくせ、いまにも動き出しそうな、血の通った生々しい生命力があった。

「すばらしいですよ、政之介さん。これを錦絵にしましょう」

「とんでもない、好きに描かせてもらえるだけで十分です」

「ほんとにそうお思いですかい。これだけ描いたら錦絵にしてみたい、お客の反応を見てみたい、と思うのが道理でしょう」

「いや、でも……」

「なあに、心配はいりません。名を変えればいいんですよ。名前を変えて、そうだ、黒雲母の雲母刷りで、思いっきり派手に打って出ましょうぜ」

雲母刷りは、雲母や貝殻の粉を絵の具にまぜてぬり込む手法で、背景などに使われた。しかし、一歩まちがえば派手で悪趣味にもなりかねないため、ひんぱんには使われない手法だった。意表を突くやり方で一矢報いたいという、葛屋重三郎の反骨精神でもあった。

「雲母刷りの役者絵ですか。あまりにしゃらくさいんじゃないやありませんか」

「しゃらくさい、上等ですよ。ようがす。それにしましょう。名は写楽でどうです」

「写楽……」

後世に名を残す天才絵師、東洲斎写楽の誕生だった。

葛重と写楽はその年五月、役者大首絵を二十八点、すべて大判の雲母刷りで一気に発売するという豪胆さで、華々しく売りだした。

（茂木ちあき『清政——絵師になりたかった少年』）

（注1）清長さん……政之介は、父のことを「おとつあん」とも「清長さん」とも呼んでいる。

（注2）しゃらくさい……しゃれたまねをして、なまいきである。

問一——線部①「家に帰るたびに、政之介の画帳を見るのが楽しみでもあり、恐ろしくもあった」とありますが、それはなぜですか、説明しなさい。

問二——線部②「右手がはれるまで打ち付けた」とありますが、それはなぜですか、説明しなさい。

問三——線部③「篤重は政之介を認めると、一瞬、驚きの表情を浮かべた」とありますが、なぜ驚いたのですか、答えなさい。

問四——線部④「無骨で荒々しく、何かに憤っているような、たたきつけるような線だった。そのくせ、いまにも動き出しそうな、血の通った生々しい生命力があった」とありますが、政之介の絵がこのように変化したのはなぜだと考えられますか、説明しなさい。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの心というのは常に安定しているわけではない。誰しもが、悲しんだり、喜んだり、怒ったり、泣いたり、さまざまな「心のゆらぎ」を抱えている。ここではまず、この「心のゆらぎ」につけ込むタイプのものを、第一種ニセ科学として分類しながら説明していこう。

この第一種ニセ科学には、占いや超能力、あるいは疑似宗教と呼ぶべきものが属する。ここでいう疑似宗教というのは、宗教のようで宗教でないもの、すなわち宗教に似せた別の代物のことだ。このジャンルは一見すると、「ニセ科学」という科学的な分類には入らないと思うかもしれない。しかし、「なぜ怪しげな宗教に引っぱり込まれるか」という仕組みの部分に、実は科学的な領分が存在しているように、科学と関係があるのだ。

例えば、私たちには未来がどうなるのかわからない。わからないからこそ、不安におびえ、ゆらぎ、知る術を与えてくれるものを求めてしまう。また、自分ではどうすることもできない悲しみや苦しみがあったとき、その苦痛を払いのける方法を教えてくれるものにすがってしまふ。占いやおみくじに頼る現象は、その典型的な例と言える。もちろん、人によっては、占いやおみくじによって迷いを吹っ切って安心を得ることで前向きになれるというケースもあるから、個人の趣味レベルにとどまっているうちは問題ない。しかし、それが個人の枠をはみ出し、すべての人間に適用できると勘違いすることで、他人の運命や人生まで左右するようになってしまふと大変危険である。

実は、冒頭に挙げた「血液型」の例もここに属する。結論から言えば、血液型は人間の性質を本質的に決めているものではない。これはさまざまな研究においてすでに明らかにされていることだ。実際、血液型で性格を気にするのは日本と韓国だけ。他の国々では話題にもならないし、そもそも人間をたった四種類に分類することなど不可能であるのは自明の理である。ちなみに一般的には知られていないが、血液型というものは細かく分類すると、最低でも五〇種類にのぼる。本当に性格を決定づけるという科学的根拠が存在するなら、五〇種類に分けて説明していかなくてはならないはずだ。つまり、簡略化すれば四種類に集約できるという側面が、占いに都合よく利用されているにすぎないのである。

こういう血液型占いをゲーム感覚で楽しんでいるうちはいい。しかし驚くべきことに、とある企業において、血液型に応じ

て社員を採用したり、社内のチーム編成を行うということが起きてしまった。血液型によって人を分類し排除するという、恐ろしくもバカげたことが、一部で実際に行われているのである。これは人間が持つ本来の可能性を摘み取ることにほかならない。血液型にかぎらず、名前も誕生日も生まれ年も、本人の力とは全く関係のないところで決まるものである。人生というものは、自分自身の努力や熱意によって決まるもの。だから外側から勝手に貼られたレッテルなどまったく気にする必要などない。自分のこれまでの生き方を内側から省みるほうがよっぽど有益だ。

それから、いわゆる「超能力」というもの。オーラとかテレパシーといったものがその代表的な例といえる。さらに、気や霊といったものを信じる人もいる。また例えば、道具も何も使わずに遠方の人と会話ができる。これらはある意味、現代科学を否定するところに端を発している。簡単に言えば、「すべてが科学で説明されているわけではないのだから、こういうことがあってもいいだろう」という主張である。つまりオーラやテレパシーの力を標榜する人々は、科学を超えた「超科学」がそこに存在すると言いたいのだ。

ところが、実はそういった超科学の主唱者が述べている内容は、数々の実験や理論の積み重ねと裏打ちによってすでに解明されている。<sup>(注3)</sup>範疇のものばかりであり、その主張はすべて過不足なく否定されている。彼らは心や精神の世界が物質で表せないことを利用し、「未解明の科学」と称することで、現実世界から目を背けたいという人々の無意識の願望につけ入っているにすぎないのである。

そして、第一種ニセ科学の中でもとりわけ厄介なのが疑似宗教。誤解しないように言っておくが、これは宗教一般を指すものではない。本来の宗教というものは、心の悩みを受けとめ、いかに健全に生きるべきかということを教えてくれるものだ。ところが、中には「〇〇すれば金持ちになれるぞ」といった、物質的な利益に絡めて教義を説く怪しげなものがある。これが疑似宗教である。当然のことながら、本当の宗教というものは、物質的な利益とは無関係のものはずだ。

この疑似宗教の問題は、現世の利益・不利益を振り回したり、「たたり」といった言葉を使って脅迫や洗脳を用いることで、信奉を強要してしまう点にある。それがどれほど危険なことであるかは、君たちにも充分わかるだろう。

こうした「心のゆらぎ」につけ込むニセ科学に対抗するうえで、知っていて非常に役立つのが「平均への回帰の法則」だ。これは統計学的な現象としてきちんと認められているものだ。

人間の心も含め、この世の事象というもののすべて、一定の安定した状態では進まない。上がったたり下がったり、山・谷・山の波を繰り返しながら、平均のラインを常に上下している。例えば、学校のテストの得点というものを思い浮かべてほしい。平均の上だったり、下だったり、いつも同じ平均点を取るわけじゃない。問題が難しいときもあれば、易しいときもあるし、身体の調子のいいときもあるし、悪いときもある。そういうさまざまな要素を含みながら、上下を繰り返し、結局は平均の数字に回帰するのだ。実際に、中間試験で特別に高得点だった学生たちに注目して調べると、一般的に期末試験では中間試験のときよりは平均点により近いという結果になる。それは、中間試験で働いたさまざまな偶然が、期末試験では必ずしも働かないからだ。君たちのご両親や学校の先生の中には、「褒めると成績が下がり、叱ると上がる」というジンクスを信じている人もいるかもしれないが、当然ながらこれは誤りである。褒める場合というのは、いつもの状態より上の成績を取った場合だと思われるが、平均回帰への法則に従えば、その次の成績は多かれ少なかれ以前より下がる場合が多い。ところが、この法則を知らないと、成績が下がったという現象を「褒める」という行為の結果だと誤解してしまうのだ。これは「叱る」場合も同じである。叱る場合というのは、いつもの状態より下の成績を取った場合なのだから、その次の成績は必ず上がることになる。

この点に留意しながら、今度は「幸運グッズ」と呼ばれるものについて考えてみよう。私たちが幸運グッズを買うタイミングというのは、「最近ラッキーだな」と感じるときよりも、何か悩み事を抱えていたり、困ったことが起きたときのほうが圧倒的に多いのではないだろうか。つまり、どちらかといえば自分自身が「幸運でない」と思う状況で、すがりたい気持ちでそれらのグッズを買う。すると、しばらくして幸運が舞い込む。それを「幸運グッズのおかげだ」と思い込んでしまう。

このカラクリ、今ならもう君たちにもわかるはずだ。そこで舞い込んできた幸運は、もちろん購入したグッズのおかげではない。単に平均への回帰の法則に従って、マイナスに偏った値からプラス方向に引き戻るという当たり前の現象が起きたにすぎない。つまり、不運も幸運も、平均からのズレなのである。どちらかにズレた後は、必ず平均へと戻る。その差異が、人々に「幸運」と「不運」という概念で把握されているだけなのだ。だから不運の時期の後には必ず幸運がやってくる。幸運グッズなど買わなくても、少し我慢していれば、やがて幸運がやってくるのである。

(池内了「それは、本当に「科学」なの？」『考える方法〈中学生からの大学講義〉2』より)

(注1) 冒頭に挙げた……これより前の章で血液型についての説明がある。

(注2) 標榜……広く世の中に向けて主張すること。

(注3) 範疇……同じ種類のものがふくまれる範囲。

問一 ―線部『血液型』の例」とありますが、この例を挙げることで筆者はどのようなことを伝えたいのですか。血液型に

関する現状もふくめて百字以内で説明しなさい。

問二 筆者は「平均への回帰の法則」がどのように役立つかと考えていますか。「平均への回帰の法則」の内容もふくめて説明しなさい。

三 各文の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) めきめきとトウカクを現す。

(2) ダンチョウの思いで別れる。

(3) フツコク本を手に入れる。

(4) ユウラン船に乗る。

(5) シンショウボウダイに書き立てる。

受験番号

氏名

得点

このらんには  
何も書かないこと

問一

問二

①

問三

②

問四

③

問五

④

問六

⑤

問七

⑥

問八

⑦

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)